

幼児の調理に対する興味・関心の向上を目指した 教材の開発とその有用性

山下晋平

(宇部フロンティア大学短期大学部食物栄養学科)

Development of Learning Materials for Young Children Designed to Increase
Their Interest in Cooking and its Usefulness

Shinpei Yamashita

(Department of Food and Nutrition, Ube Frontier College)

The present paper describes the development of learning materials for young children designed to increase their interest in cooking. A picture book was created with the theme of a popular school lunch menu served in Yamaguchi Prefecture: “Chicken & Chicken & Burdock”, since it can be read out for young children in daily nursing care settings. The picture book was evaluated by nursery and kindergarten teachers as well as dietitians. Although 40% or less had the experience of cooking the above-mentioned dish, 90% or more stated that “they wished to read out the picture book for kindergarten students and young children”. The kindergarten teachers felt that the book was easier to use than other picture books, and the young children commented that “they were going to ask their mothers to cook that dish”. The development of picture books that help young children learn recipes not only increases their interest in and awareness of cooking, but also encourages them to enjoy meals more.

キーワード：幼児 young children；教材開発 development of learning materials；調理工程 recipes；絵本 picture book

1. 緒言

近年、食の多様化及び簡便化等の食環境の変化により調理をせずとも、幼児及び学童はいつでもどこでも簡単に食べ物を口にすることができる。そのため、食事に対し無関心となってきたことが問題視されている。しかし、良好な食習慣を形成するためには、調理技術が関係していることが明らかになっており、望ましい食生活を実践できるようになるには少しでも調理経験を増やし、調理技術を向上させることが好ましいと報告されている¹⁾。

現在、子どもの調理経験の場が主に学校の調理実習となっているのに加え、週1回程度で時間数も限られている。その上、調理技能の習得より楽しさが重視されるため最近の子ども達は調理をする機会が少なく、食べることだけになりがちである²⁾。さらに、家庭においても平日の夕食の支度にかかる時間が短縮してい

る傾向であり³⁾、家庭で調理している姿や調理場面を子どもが見るまたは調理をする機会が減少していると考えられる。

子どもの食教育においては、家庭が重要な役割を持つと述べられているものの⁴⁾、家庭の役割が外部化・専門化の方向へ進み、子ども達は知識や技術がなくても食べることには困らない環境となっている⁵⁾。それに伴って、食教育の場が家庭から教育の場へと移行せざるおえなくなり、保育所・幼稚園への食育の導入が重要となってきた。保育所並びに幼稚園において、主に食育を担当しているのは「教師・保育士」と報告されており⁶⁾、さらに多くの保育者が「食事場面」を食育の実施機会として重要視していることが報告されている⁷⁾。

そのため、本研究では「食事場面」以外の普段の保育現場における「読み聞かせ」の一環として使用でき、「食事場面」における食育につなげることができるよ

うな内容の教材を作成することとした。また作成した教材は、保育士・幼稚園教諭・栄養士に評価・実施してもらうことで有用性を検討した。

2. 方法

2-1. 教材の作成

1995年ごろ、給食に家庭のオリジナル料理を採り入れようと各家庭に募集した時に応募された料理で、子どもたちの好きな献立アンケートでいつも上位になっている「チキンチキンごぼう」⁸⁾を題材にした。また、教材は、保育士ならびに幼稚園教諭が普段の保育現場における「読み聞かせ」の一環として食育を行えるよう絵本を選択した。

2-2. 教材の評価

(1) 対象者

保育所または幼稚園勤務の栄養士、保育士と幼稚園教諭の計36名に教材を読んでもらい、作成した教材について質問紙調査を行った。

(2) 調査内容

質問紙は、「チキンチキンごぼう」の認知度に関する項目、教材の評価に対する項目、食育に関する項目で構成した。認知度に関しては、「知っている」または「聞いたことはある」と回答した人に対して、「食経験」及び「調理経験」に関する項目も調査を行った。また、教材の評価に関しては対象年齢についての質問に、4項目（「年少」「年中」「年長」「小学校低学年」）から複数回答の選択式で調査を行った。

食育に関する項目は食に関する手引き⁹⁾をもとに「食育で指導しにくい分野」については6項目（「食の重要性」「心身の健康」「食文化」「社会性」「食品を選択する能力」「感謝の心」）から複数回答の選択式で調査を行った。

2-3. 教材の効果

A幼稚園の6歳児19名を対象として、クラス担任の幼稚園教諭に読み聞かせを依頼した。

読み聞かせ後、幼稚園教諭に「幼児の反応」及び「幼児の感想」についての項目を自由記述で、絵本の使いやすさについては「使いやすい」、「使いにくい」、「変わらない」の3点法で調査を行った。

2-4. 統計解析

「チキンチキンごぼう」の認知度については「知っている」または「聞いたことはある」を合計して「認知度 有」として集計した。また、「チキンチキンごぼう」の認知度、調理経験や食経験の有無が読み聞かせ意欲に与える影響を検討するために、カイ二乗検定を用いた。検定の有効水準は5%未満として行った。

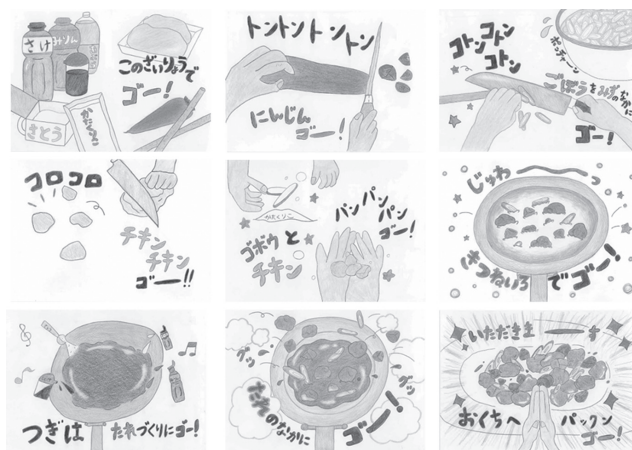
3. 結果

3-1. 作成した教材の内容

教材は、まず使用する材料をみせ、材料を切る、揚げるなど調理工程を学べるような内容にした。また、言葉の語尾に「ゴー！」をつけ、リズムよく読み聞かせができるように作成を行った（図1a, 1b）。



図1a 作成した教材（絵本）



※内容は一部抜粋

図1b 教材の内容

3-2. 教材の評価

(1) チキンチキンごぼうの認知度及び教材の評価

チキンチキンごぼうの認知度は83.3%と高く、回答者の多くがチキンチキンごぼうという料理を知っているという結果が得られた（図2a）。また、チキンチ

幼児の調理に対する興味・関心の向上を目指した
教材の開発とその有用性

キンゴぼうを知っていると回答した人でチキンチキンゴぼうの食事経験、調理経験があるものはそれぞれ90.0%、36.7%であった(図2b, 2c)

保育士、幼稚園教諭と栄養士に作成した絵本を読んでもらったところ、絵本を園児・幼児達に読み聞かせたいと答えた人が91.4%であった(図3)。また、読み聞かせ意欲に「チキンチキンゴぼう」の認知度、調理経験や食経験の有無が読み聞かせ意欲に与える影響をみてみたところ、認知度がない人では読み聞かせたいと答えた人が50%と、全体と比較して有意に低かった。その一方で、調理経験や食経験がない人は、それぞれ100%、94.7%と高い結果が得られた。

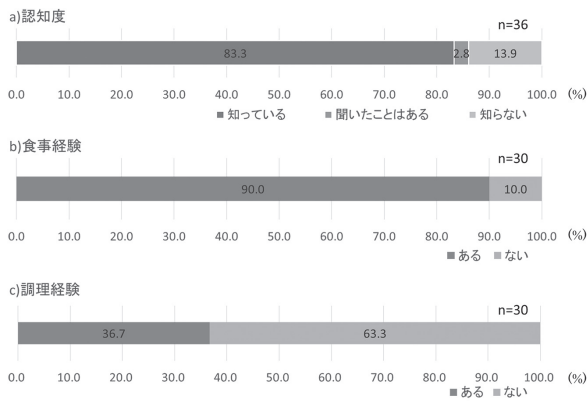


図2 チキンチキンゴぼうの認知度

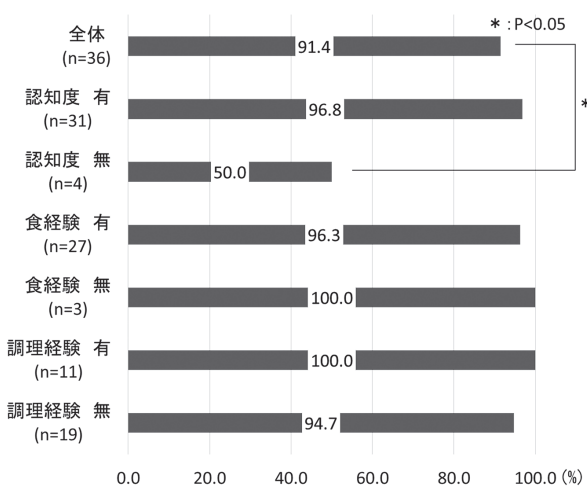


図3 教材の読み聞かせ意欲

(2) 教材の対象年齢

教材の対象年齢は、年少が52.8%と高い一方で、小学校低学年は13.9%と低い結果が得られた(図4)。

また、職種別にみても、保育士・栄養士では年少と答えた人が多かった一方で、幼稚園教諭では年少

の回答が見られず、年長が最も多くみられた。

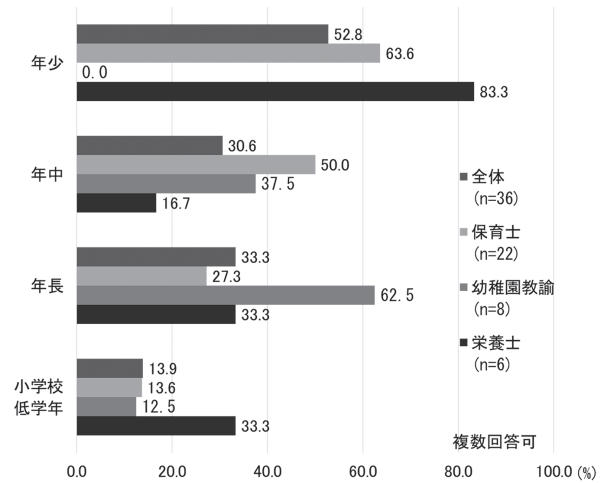


図4 教材の対象年齢

(3) 食育で指導しにくい分野

食育で指導しにくい分野として、「食文化」が60.0%、「心身の健康」が45.7%と高い一方で、「食の重要性」、「感謝の心」はそれぞれ17.1%、8.6%と低かった(図5)。

また、職種別にみても、保育士と幼稚園教諭は「食文化」、「心身の健康」の順で高く、栄養士は「食文化」と「食品を選択する能力」が同じ値を示し、次いで「心身の健康」が高く、すべての職種で「食文化」の分野が最も指導しにくいと考えられているという結果が得られた。

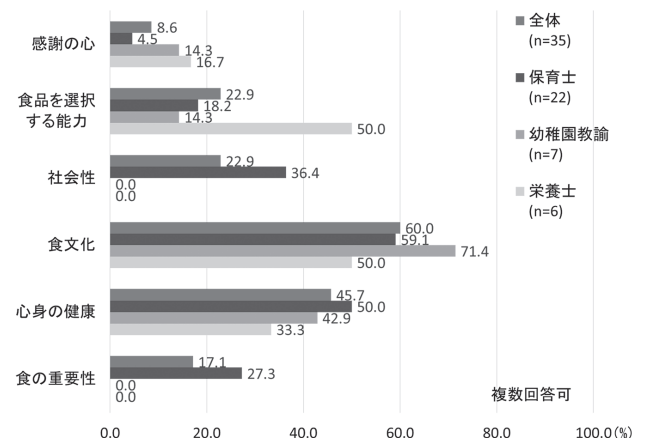


図5 食育で指導しにくい分野

3-3. 教材の効果

教材を用いて幼児対して読み聞かせを行ったところ、

幼稚園教諭から、普段読み聞かせに使用する絵本に比べて使いやすいという結果が得られた（図6）。

また読み聞かせ終了後、子どもたちから「お母さんに作ってって言うてみる」等の感想も得られた一方で、幼稚園教諭の感想として「毎ページゴー！といれるのは違う」といった意見も得られた（図6）。

実施日時	平成27年 9月 3日(木) 12:30 ~ 12:50
対象者・人数	幼児(6才児) (17人)
使用した絵本	※【 】には記入してください。 【○】チキンチキンごぼうでゴー！ 【 】さきごはんでゴー！
実施の効果	【幼児の反応・感想】 「食べたい」「美味しそう」「お母さんに作っててさきごはんでゴー！」等の感想が聞かれた。 「毎ページゴー！」を繰り返して言うてみる。 【実践の評価】
その他	絵本を使用するの感想もしくは絵本の改善点等あれば記入してください。 「毎ページ」「ゴー！」の「入るの」年長の読む本は「違うかもしれない」内容は年長でも読むものだった。
今後の取組予定 (食育について)	普段読み聞かせをおこなう絵本と比べ使用した絵本はどうでしたか？ 【 】には記入してください。 【○】使いやすい 【 】使いにくい 【 】変わらない

図6 読み聞かせ後の教材評価

4. 考察

幼稚園教育要領への食育に関する事項の追加¹⁰⁾や、保育所保育指針への食育への項目の追加¹¹⁾等で保育者の食育への役割が大きくなってきている。しかし、保育者は養成校において幼児の身体的特徴や保育方法に関する専門科目を学ぶ中で小児栄養について学ぶ時間が限られているのが現状である。本研究では、その現状を考え普段の保育現場における「読み聞かせ」の一環として食育を行えるような教材を開発することとした。

今回、題材として使用した「チキンチキンごぼう」は認知度、食事経験が高い一方で、調理経験は低いという結果が得られた。そのため、作成した教材は調理工程の内容を含んでいたため難しく、保育者らが読み聞かせを行うには読み手の負担が大きい可能性が考えられた。しかし、教材を実際に読んだ栄養士、幼稚園教諭、保育士の91.4%が「園児・幼児に読み聞かせてみたい」と回答していたことから、題材における調理経験の有無は読み手の負担に影響しないことが示唆された。さらに、食経験、調理経験があるものの方が「園児・幼児に読み聞かせてみたい」と回答している割合が高いという結果が得られた一方で、認知度が低いと読み聞かせ意欲は、有意に低くなるという結果が得ら

れた。そのため、食育教材を開発する際には認知度が高いものを題材とすることで読み聞かせ意欲を高めることができると考えられた。

作成した教材の対象年齢は年少が最も多かった。これは絵を大きく描き、言葉数も少なく易しい内容であったため年少からでも学ぶことができるとされたことが推察された。しかし、同じ本にも関わらず職種により対象年齢の認識が違うことが示唆された。

食育で指導しにくい分野では、職種で差が見られたため、食育を連携して行うことにより、苦手分野を互いに補完していくことができると推察された。だが、「食文化」の分野においては、すべての職種で指導しにくいと感じているという結果が得られた。これは前述したように、保育者においては、養成校において限られた時間で小児栄養を学ぶため「食文化」についての内容を学ぶ機会が少なく、栄養士においても食品や栄養については詳しく学ぶものの「食文化」について学ぶ時間が限られていることが影響していると考えられる。そのため、「食文化」を指導しやすくするための食育教材開発が急務である。

作成した絵本を用いた読み聞かせは、子どもたちに「食べたい」「お母さんに作ってって言うてみる」といったような感想を抱かせることができ、読み聞かせで調理工程を見て学んでもらうことで、食べたときに“美味しい”だけではない感想が子ども達から聞くことができると考えられる。そして、食に対して無関心となってきたといわれている子ども達が、食事をするときに今までとは違う視点で食と向き合うことができ、食事が一層楽しくなり食に対する関心の向上が期待できる。また、読み聞かせを行った幼稚園教諭が普段使う絵本に比べ「使いやすい」との回答があり、作成した絵本は有用性があると考えられた。しかし、絵本の対象年齢については、幼稚園教諭において年長という回答が最も多かったが、実際の読み聞かせに使用してみると年長向けではないといったような、読み手の教材の認識と実際に使うことによるギャップが生じる可能性が推測された。

本研究では、「読み聞かせ」の一環として使用できる食育教材として絵本を選択し作成を行った。絵本は、絵本の中に自分が入っていき疑似体験し知識を得ることによって実際の生活の中で生かし、実践したくなるようなことが多くあると報告されている¹²⁾。また、親子の信頼関係やコミュニケーション能力を育むもつとも大切な時期は幼児期であり、幼児期での親子の関

わり方が学校や社会への適応力に影響してくることが考えられているとも報告されている¹³⁾。今回の研究では幼稚園での読み聞かせしか行わなかったが、家庭で子どもに絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもとのコミュニケーションが増え、調理も実践しやすい家庭環境へのきっかけ作りになると考えられる。

今後は保育所や幼稚園だけに限らず、作成した絵本を用いた読み聞かせ及び、読み聞かせ後の調理実習を行ってもらった事例を増やして教材の評価を行い、教材の有用性を再検討する必要がある。

5. まとめ

本研究は幼児の調理への興味・関心の向上を目的に、幼児向け教材の開発を行った。教材は普段の保育現場における「読み聞かせ」の一環として使用できるように絵本を選択し、題材は山口県で人気のある給食メニュー「チキンチキンごぼう」とした。作成した絵本を保育士、幼稚園教諭と栄養士に評価してもらったところ、この料理を調理したことがあると答えた人は40%以下だったのにも関わらず、「園児・幼児に読み聞かせてみたい」と答えた人は90%以上であった。また、読み聞かせを実施した幼稚園教諭から、普段読み聞かせに使用する絵本に比べて使いやすいと評価が得られ、幼児たちからも「お母さんに作ってって言うてみる」等の感想も得られた。そのため、調理工程が学べる絵本を開発することで、幼児たちの調理への関心や意識が向上するだけでなく、幼児たちが食事を一層楽しむことができるようになると考えられた。

6. 謝辞

この研究をご理解いただき、協力していただいた保育士、幼稚園教諭、栄養士の皆さまに厚くお礼申し上げます。また、本研究の教材作成並びデータ収集にご協力いただきました宇部フロンティア大学短期大学部54期生の岡本碧さん、町田友香さんに感謝申し上げます。

7. 参考文献

1) 磯部由香, 宮園愛, 成田美代

男子大学生の調理技術と食生活との関連, 三重大学教育学部紀要. 自然・人文・社会・教育科学,

59, p.101-105, 2008

- 2) 神谷麗奈, 久世真理子, 中村由紀子, 平島円, 磯部由香小学校家庭科における調理技術の向上を目指した授業の開発, 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学. 65, p.233-239, 2014
- 3) 水産庁 (2012) 「水産白書」
- 4) 内閣府 (2005) 「食育基本法」
- 5) 奥野元子, 食育活動における地域連携のあり方と学生の実践能力の育成—平成20・21年度食育活動報告—島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, 49, 61-71, 2011
- 6) 会津短期大学:食育に関する実態調査報告書(2008) <http://www.jc.u-aizu.ac.jp/09/13512.pdf> (2016年9月29日)
- 7) 逸見真理子・焰硝岩政樹・春名かをり・大西孝司 保育所における食育の実態と連携のあり方. ノートルダム清心女子大学紀要, 35 (1), 91-103, 2011
- 8) 山口市 (2012) 市報やまぐち http://www.city.yamaguchi.lg.jp/cms-sypher/open_imgs/info/0000013962.pdf (2015/11/24)
- 9) 文部科学省 (2010) 食に関する指導の手引—第1次改訂版—第5章学校・家庭・地域が連携した食育の推進
- 10) 文部科学省 (2008) 「幼稚園教育要領」
- 11) 厚生労働省 (2008) 「保育所保育指針」
- 12) 堤千代子, 森恵子, 永島倫子, 菅淑江絵本の中の食育中国学園紀要, 7, 177-188, 2008
- 13) 高畑彩友美, 富田圭子, 饗庭照美, 大谷貴美子 母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響, 日本家政学会誌, 57 (5), 287-299, 2006-05-15

